# 願いの魔法
## ～Battle Royal～

赤い死神

# 目次

プロローグ　異端の魔法使い　1
第一章　迷える子羊　4

# プロローグ　異端の魔法使い

魔法帝国日本において、今までに多くの魔法使いを輩出してきたアーレント魔法学園。ここでは日夜、沢山の学生達が立派な魔法使いになるべく自分を磨き、学校側もそれにふさわしいだけの環境と授業を用意していた。

一つに、魔法に関する知識を深める授業。

一つに、道具に魔力を込めることによって作られる魔法具（アーティファクト）に関する授業。

一つに、数学や国語といった、一般的な学業をこなす授業。

そして、

「まさかこんなに早く、貴方と戦える日が来るとは思っていませんでしたわ」

実際に魔法を使って戦う、実技の授業。

学園内にある訓練場は屋内に作られたグラウンドのような施設である。この日もそこで、2―Cと2―D、二クラス合同の実技の授業が行なわれていた。

教師によって選ばれた二人が、各々日々磨いてきた魔法を使って実際に戦うのだ。当然怪我人などがでるため、訓練場の隅では救急要員がスタンバイしている。

今向かい合っているのは、2―Cに所属する藤原（ふじわら）アイと、同じく2―Cに所属している風見千里（かざみちさと）の二名である。二人はグラウンドに引かれた白線のコート内で対峙し、戦いが始まる時間を待っていた。

「よろしくね、アイちゃん」

「馴れ馴れしく〝ちゃん〟付けで呼ばないでください。私（わたくし）は貴方と馴れ合うつもりなど、これっぽっちもありませんわ」

瑠璃色の瞳が、千里（ちさと）を睨み付ける。

「えーっ、どうして？　わたしはアイちゃんと仲良くしたいな」

「フンッ。白々しい。貴方も風見（かざみ）様をお慕いしているのでしょう？　いつもいつも、恋人でもないのに風見（かざみ）様にベタベタして、羨ましい……ではなく、生意気ですわ！」

「だって、兄妹だもん。仲良くするのは当然だよ」

「そんなつい最近できた兄妹の絆など、私と風見（かざみ）様の愛の前では霞んで見えますわ」

「アイちゃん、ホントに俊（しゅん）ちゃんの事が好きなんだね」

「当然ですわ」

胸を張るアイ。どうにも会話の繋がり方がおかしいような気がするが、本人達は一向に気にした様子もなく、アイは好戦的に、千里（ちさと）はのんびりした調子で口を動かしていた。

だがそれも、教師の笛の音が訓練場に響いた瞬間に終わりを告げる。

戦闘開始の合図だ。

「始まりましたわ。言っておきますけど、手加減はしなくてよ？」

「そんなぁ。わたし実技の授業初めてなのに……」

訳あってつい先日この学園に転入した千里（ちさと）は、魔法の基礎を学んでいる間実技の授業に参加することはできず、今日ようやく許可が下りたところだった。そのため、魔法を強化する魔術媒介も持たずに、素手でそこに立っている。ちなみに、対峙するアイの魔術媒介はアイの身の丈より大きな弓である。

「問答無用。行きますわ」

アイが弓の弦を引くと、そこに魔力で作られた矢がセットされる。道具に魔力を流し込

む事によって、魔法を顕現させる。それが魔術媒介の役割だ。人体に流れる魔力を、あらゆる形でイメージし、実体化させることによって魔法が発現されるため、魔術媒介は人それぞれで、オーソドックスな杖を使うものから、銃を使うような変わり種の魔法使いも存在する。

「はっ！」

引き絞った弓から矢が放たれる。風属性の魔法によって作られたそれは、まっすぐに千里の元へ。

「うわっ!?　え、えいっ！」

しかしそれは千里に届くことはなく、千里の作った黒い壁に飲み込まれて消えていく。

「くっ……」

苦虫を噛み潰したような顔をしながら、アイは再び矢を放つ。今度の矢は途中で六本に分かれて、一本一本が意思を持っているかのように千里に向かって飛んでいく。

「あわわっ。なんかいっぱい飛んできたよ。えっと……えいっ！」

しかしこれもまた、千里を囲むように出現した黒い壁に阻まれて消失する。黒のカーテンの向こうに見える千里は、全くの無傷だ。

「厄介な魔法ですわ。お兄様や風見様なら、あんな魔法、貫くことができるのに……」

「もう終わりかな？　それじゃ、次はわたしの番だね。えいっ」

「ッ!?」

アイの影から黒い手が現れ、四肢を拘束する。

「くっ、こんなもの……ッ！」

拘束から逃れようと体を振り回すアイ。

だが、その手を振り払うことができないばかりか、逆に強くなる締め付けに耐えられず、アイの手から大弓が零れ落ちる。

どれだけ暴れても拘束は解けない。アイの動きを封じているのは、人ではなく魔法なのだ。同じように魔法で対抗しなければならないのだが……アイにはそれができない。

「このっ！　このっ！」

それでも抵抗を止めようとしないのは、降参はアイのプライドが許さないからか。それとも、負けたくない理由があるからか。

だが、現実は常に無情で残酷で公平だ。

「わたしの勝ちだね」

個人の情念は、結果を前に霞んで消える。

いつの間にか目の前にやって来ていた千里が、アイを見下ろしながら言う。アイの目はキッと千里を睨みつけるものの、しかし拘束を解く手段はない。

やがて諦めたように項垂れ、

「……私の負けですわ」

悔しそうに、小さくそう呟いたのだった。

そんな二人の戦いを、何人もの生徒達が見ていた。

彼らの注目を集めているのは、ひとえに千里……の魔法だ。

「あれが、闇の……」
「魔法を吸収するんだってよ。反則じゃねえか、あんなの」
その声に、余り好意的なものは含まれていない。
ヒソヒソと、あくまで本人に聞こえないようにか……あるいは他に聞かれたくない者がいるのか。その場、そのメンツにのみ聞こえる程度の声で、会話は進んでいく。
「大体、闇ってなんかイメージ悪いよな」
「あんな可愛い顔して、性格とかすんげえ根暗だったりな」
「陰湿だとかな」
未知への恐怖。
持たざるものの嫉妬。
異端を受け入れられない狭量さ。
彼らが胸に抱くものはそんなところだろうか。余り綺麗な感情とは言い難い。
そんな声が聞こえているのかいないのか、
千里(ちさと)はグラウンドの真ん中で、ニコニコと笑顔をアイに向けていたのだった。

# 第一章　迷える子羊

「いってきまーす」
玄関の扉を開けて、白いブレザーにチェックの入ったグレーのスカートを穿いた千里が出てくる。
「俊ちゃん。早く早く」
「わかってるって。んじゃ、いってくるわ」
「はい、いってらっしゃい。千里。俊介」
母親に見送られ、千里とその兄である風見俊介（かざみしゅんすけ）は、今日も今日とて二人揃って家を出て、学園へと赴く。
「今日もいい天気だね」
「まあ、そうだな」
言われて空を見上げてみれば、雲一つ無い快晴だ。桜はさすがに散ってしまったものの、まだ梅雨に入る前の五月の空は、暑いと言うよりもまだ温かく二人を照らしている。隣を歩く千里の長い黒髪は、日の光を受けて艶が増して見えた。
「今日は普通の授業多いから、やる気でねえな……なんで折角アーレント魔法学園に入ったってのに、数学やら国語やら勉強しなくちゃいけねえんだよ。そう思わないか？」
「え、でも、そう言う勉強もしておいた方がいいってお母さんもお父さんも言ってたよ」
「オレは魔法使いになれりゃそれでいいんだよ。勉強なんて面倒なだけだぜ……ったく」
千里と歩く通学路。つい先日まで一人で歩いていた場所を、ずっと昔に会えなくなった千里と一緒に歩けることが何だか不思議で、嬉しかった。歩き慣れた通学路が、何だか違った道にすら思えてくるから不思議なものだ。
千里と並んで、談笑し、歩く通学路。
雀が鳴き、風が歌い、そして――
「……ん？」
「どうかした？　俊ちゃん？」
「いや……なんかな……」
学園が近づき、他の学生の姿もちらほらと見え始めた頃、俊介は眉を顰めながら周りを見た。
「最近、周りから見られてるような気がするんだよ。目が合ったと思ったら逸らされたりな」
「それはほら、俊ちゃん女の子にモテモテだから。アイちゃんとか、愛情表現が凄くストレートだよね」
「いや、女子だけじゃなくて男子にも見られてる」
「うわーっ。俊ちゃん、女の子だけじゃなくて男の子にもモテるんだね」
「……それは勘弁してくれ。オレはいたってノーマルだぞ」
とはいうものの、一般的なこの年代の男子にしては、色恋沙汰に淡泊なイメージは拭えない。美少女と言って差し支えないアイから焼けるほどの好意を寄せられているのだが、俊介は全くそれに応える気はなく、まるで年下の子供をあしらうように扱っている。
もっとも、まるでも何もアイは事実俊介の一つ年下なのだが。
「ねえねえ、どうして俊ちゃんはアイちゃんと付き合わないの？」

「なんでって、別に好きじゃないからな」
「でも、嫌いじゃないでしょ？　だったら、付き合ってあげてもいいのに」
「あんま興味ねえんだよ、そういうのは。前はただ強くなることしか考えてなかったから、他の事なんてどうでもよかったし」
　それに関しても、すでに隣では可愛らしい笑顔を浮かべて歩く千里がいるので、前ほど強く思いはしなくなっていた。もっとも、負けず嫌いな性格とプライドから、相変わらず授業では負けることを極端に嫌がっているが。
「でもでも、やっぱり学生らしく恋の一つでもしてみたほうがいいんじゃない？」
「いつからそんなこと言うようになったんだよ。またレイに変な入れ知恵されたのか？」
　ついこの間まで学校に通うことができずにいた千里は、俊介とは別の意味でそう言ったことに無頓着だったのだが、どうも最近俊介の悪友であり、変人でもある藤原レイが学校生活のなんたるか、というのを千里に教えたらしい。その結果、こんな口を利くようになったのである。
「そういうお前はどうなんだよ？　それが学生らしいっつーなら、お前も彼氏の一人ぐらい用意してこいよ」
「え、あ、ほら、わたしは……えっと、そういうのよくわかんないし」
「よくわかんないこと俺に勧めてたのかよ。ったく」
　呆れてため息を吐きながら、徐々に増えてきた生徒達にさりげなく目をやる。
（……やっぱ見られてんな。ったく）
　同じ白のブレザー、白のズボンという学園の制服を着た男子のグループと目が合うキッと一睨みすると、向こうは慌てて目を逸らし、ヒソヒソと何かを話しているようだ。
（言いたいことがあるなら、ここまで来てハッキリ言えっつーの。うぜえな）
　いっそこっちから怒鳴り込んでやろうかとも思ったが、千里もいるので自重する。隣の千里は、まるで周りの視線など気にならないかのように可愛らしい笑顔を浮かべていた。
（ま、いいか）
　何だかそれを見ていると、些細なことがどうでもよくなってくる。
　なんだかなあ、と俊介は頭を掻きながら校門をくぐるのだった。

「風見様。お会いしたかったですわ！」
「昨日も会っただろうが。ったく、毎日毎日飽きねえ奴だな。歩きにくいからさっさと離れろ」
　教室に入るなり、抱きついてきたアイのロールの掛かった金髪がこそばゆく、振りほどいて自分の席へと歩いていく。
「もう、風見様ったらつれないですわ。でも、そこがまたいいですわ」
「ふっ。お前は相変わらずシュンに夢中だな。まあ俺としても、シュンが義弟になるというなら歓迎するが」
「んなつもりねーっての」
「ふむ、それは残念だ」
　顎に手を当てながらうんうんと首を振る男子は、アイの兄である藤原レイだ。学問においては学年トップ、実技に関しても俊介に次ぐ学年Ｎ０．２であるのだが、むしろそれ

よりも奇人変人っぷりの方が有名な男である。
「大丈夫ですわ、お兄様。いつか私の魅力に、風見様はきっと気がついてくれますから」
「ならば俺はその日を楽しみに、式場の準備を済ませておこう。都内の有名ホテルの式場なら、三、四千人程度なら収容できるだろう」
「なんで恋人をすっ飛ばして結婚まで行くんだよ！　つーか、何人呼ぶつもりだ！　いやそもそも、オレはアイと付き合うつもりは一切ないっての！」
「気にするな、お前の気持ちなど些細な問題だ」
「そこは一番重要だろ！　さらっとオレの意思を無視するなよ！」
はっはっはと声を上げて笑うレイに、俊介は肩を落としてため息を吐く。二人の付き合いは去年からだが、誰が見てもそうは見えないほど息がピッタリである。主に、ボケとツッコミの部分において。
「ん、来ていたのか、風見。おはよう」
「おう、おはよう、健一」
レイとアイの馬鹿騒ぎにつられてやってきたのは、レイとシュン共通の友人である中田健一である。レイと同じく、去年からの付き合いで、突拍子もないことばかり言うレイとは対照的に、事態を静観し、必要であれば手を貸すようなタイプの友人だ。
「さて、では今日も頼もうか」
ちなみに、趣味というか特技は魔法を使った占いである。大アルカナのカードを宙に投げると、カードは健一を囲むように円を描いて宙に留まり、しばらくして回転を始める。
占いといっても俊介は何をするでもなく、輪から抜けた一枚のカードを手に取った健一から結果を聞くだけである。もともと占いなど余り信じていない俊介が健一に付き合うのは、友人であるからというのと自分が何もしなくていいから、というのが理由だった。
「……逆位置の〝運命の輪〟か。意味は……そうだな、望まない変化、といったところか」
「つーと、オレが変わることを望んでないって事か？」
「いや、これはお前の望まない方向に変化していく、ということだろうな」
「望まない方向に変化……なあ」
千里の一件で色々な物が一気に解決したはずなのだが、また何か起こるということなのだろうか。
隣で聞いていたレイが「ふむ」と何かを考えるように口を閉じた。
「……まあ、何かあれば、俺達がお前の力になる。だからあまり気にするな」
「オレは別にから占いなんて信じてないって」
「そう言う意味ではないんだが……まあ、そうだな。こちらで色々と考えておこうか、藤原」
「そうだな。お前達の度肝を抜くようなビックリドッキリイベントを考えておこう」
「……普通でいい」
レイは健一の言わんとしているところがわかっているように返事をする。一人置いてけぼりにされた俊介が無言で眉を顰めた。
「あ、俊ちゃん占いしてもらってるんだ。いいなあ。ねっ、中田君。わたしも占って欲しいな」
「ああ。構わないぞ」
二つ返事で頷き、俊介の時と同じようにカードを展開する。

「わくわく」
「そんなに純真な目で見られると少しやりにくいぞ……」
「あ、ごめんなさい。楽しみでつい」
「……まあ、構わないが。ん、結果が出たぞ。正位置の〝法皇〟か。意味は、協力者が現れる、ぐらいがよさそうだ」
「協力者?」
「風見妹にとっての理解者が現れるかもしれんな」
「ふっ……そんなものは、もうすでにここにいるじゃないか。この愛の貴公子、ラァァァァァァァァヴ、プリンス! キース・クラウドが――ながあっ!?」
「ツッコミどころはいろいろあるが、とりあえずオレの机に乗るな」
机の上で仁王立ちしていたキースの足が俊介の腕で払われ、バランスを崩したキースが教室の床に背中をしたたかに打ち付ける。
「いたた……全く、全女性を虜にしてやまない、愛の貴公子の足を払うとは、ファンの女の子に刺されても知らないぞ、風見」
「んな奇特な奴いねえよ」
(自称)愛の貴公子、キース・クラウド。俊介の今期のクラスメイトであり、根拠もなく女子から好意を寄せられていると思いこんでいるナルシストである。顔立ちや長い金髪は、普通にしていればそれなりに女子の目を引いたであろうが、本人の性格もあって、浮いた話はただの一つもない、なんちゃってプリンスである。
「大体、もし万が一お前にファンがいるってんなら、そっちを構ってやれよ。いちいち人の妹に手を出すな」
「ふっ、わかってないな、風見。ボクは愛の貴公子、ラァァァァァァァァヴ、プリンス! だぞ? 一人の女性だけを愛してしまったら、世界中の女性が悲しむじゃないか。ボクは博愛主義だからね、みんなを平等に愛するんだよ。もちろん、千里クンやアイクンのことも愛しているとも」
「吐き気がしますわ。貴方みたいな顔も性格もウジ虫以下の人間、この私が好意を寄せるなんてありませんわ。それに、私は風見様一筋でもわ」
「えっとー、たしかこういう時って、『いいお友達でいましょう』って言ったらいいんだよね、俊ちゃん?」
「速攻フラれてんぞ」
「ぐぅう、風見! やはり君とは相容れないようだな! 剣を抜き――」
給え、と言うより先に俊介は黒光りする二丁のリボルバーをキースに向けていた。キースもキースで、腰に帯びたレイピアを抜こうと手を掛けてはいるが、それを抜くよりも俊介が引き金を引く方が圧倒的に早いだろう。
「……ふっ、この美しいボクが暴力なんて醜態を晒すはずないだろう? ボクは君みたいな暴力的で粗雑な人間とは違うんだよ、風見」
「言ってろよ、腰抜け野郎」
「ぐっ……ふ、ふんっ。君みたいなのと話をしていると、このボクまで野蛮な人間に成り下がりそうだ」
と、捨て台詞を吐いてキースは逃げるように去っていく。その背中を見ながら、俊介はため息をついた。

「ったく、毎日毎日懲りない奴だな。同じことばっかやってよく飽きないな」
「全くですわ。あんな男では、いくら磨いたところで風見様のように光り輝くことなどできはしないというのに。本当、愚かな男ですわ。ねえ、風見様」
「さて、それはどうかな?」
「なんですの、中田? 何か反論でも?」
ムッと眉をひそめて健一を見下ろすように訊ねる。
「あれはあれで、磨けば意外に光るかもしれない、と思っただけだ」
「あら、あんな男をかばうだなんて、貴方もヤキが回りましたわね。冴えない男同士、共感でも覚えましたかしら? 貴方もくだらない占いなどしていないで、風見様のように自分を磨けばどうですか? そうすれば、その貧相な人間性も少しはマシになるかもしれませんよ?」
「いや、俺がいくら努力したところで風見には敵わんさ」
馬鹿にするようなアイの毒舌に、健一は眉一つ動かすことなく答える。それがなにやら気に入らないようで、アイは「ふんっ」と息を荒くはいてそっぽ向く。その隣では、「やれやれ」とレイが肩をすくめていた。

＊ ＊ ＊

「うーん」
「何だ、どうした? 便秘か?」
「ちげえよ。やっぱ、何か見られてる気がするんだよ」
昼休み。食堂にやってきていた風見一行は、六人掛けの席に座って昼食を摂っていた。
食堂の規模はかなり大きく、昼時で学生達があふれかえっているものの、座る席を確保しなくてもいい程度に、テーブルが用意されている。テーブルは三人掛けのソファーに挟まれており、俊介の隣にはレイと健一が、対面にはアイと千里が座っている。
「お前は人気者だからな。おおかた女子から熱い眼差しが送られているんだろう。たまには手でも振ってやったらどうだ?」
「そんなの駄目ですわ。風見様には私というものがいますもの」
「女子からじゃなくて男子からも見られてるんだよ」
「ほう、ついに女子だけでなく男子も虜にし始めたか。モテモテだな」
「か、風見様? そんな、いけませんわ! 男同士だなんて、不毛です! で、でも……な、なんですのこの胸のトキメキは!?」
「そのやりとりは朝やったっての。なあ、健一。この馬鹿兄妹なんとかしてくれよ」
「すまんが俺のツッコミ力では無理だ」
すっぱり答えて、我関せずとラーメンをすする健一。
「友達がいのない奴だな……チッ、またかよ」
視線を感じて振り返れば、あわてて目を逸らした三人組の姿があった。逃げるように去っていくその後ろ姿に、いい加減腹が立ってきたのかギリギリと歯を鳴らす。
「とっつかまえて、何で見てんのか吐かせてえな。マジでむかついてきた」
「駄目だよ、俊ちゃん。暴力なんて」
「オレはああいう陰に隠れてこそこそやってるような奴がだいっ嫌いなんだよ。言いたい

ことも面と向かって言えねえのかよ、ったく」
　ぶつぶつと文句を言いながらカレーを口に運ぶ。いい具合の辛みが舌にピリッと来るものの、今の俊介にそれを味わう余裕はない。
「なあ、あいつ……」
「そうだよ。俺2－Dの奴から聞いてるから」
「普通の女子に見えるけど……」
「ああっ、もう！」
　ダンッと両手でテーブルを叩く。その音に視線が一斉に集まるが、俊介はそれを無視してヒソヒソと話をしていた男子の三人組に向かって走っていく。突発的な行動に対処できなかったのか、三人組は走り寄ってくる俊介から逃げることもできず、その場に立ち尽くしていた。
「おいっ！　なんなんだよ、お前ら！　人の方見てヒソヒソ話しやがって！　言いたいことあんなら、直接言えよ！」
「な、なんだよ、お前」
「馬鹿っ。こいつ、あの風見だぞ！　実技学年NO．1で、この間も変な魔法使いぶっ倒して、警察から賞状もらってた」
「げっ……」
「何こそこそ話てんだよ！　おい！」
　三人組の一人の襟首を掴んで、至近距離で睨みつける。相手は蛇に睨まれた蛙のように動けず、怯えるように震え出す。
「その辺にしておけ、風見」
「健一！　けど！」
「やれやれ……そいつらが何を話してたか知りたいなら教えてやるから離してやれ」
「なんだよ、こいつらが何話してんのか知ってたのか？」
「俺だけじゃない、お前以外全員が知っている。優しいクラスメイトと友人達に感謝しながら、とりあえず手を離してやれ。余計な騒ぎを起こして教師からお咎めを受けるのも馬鹿らしいだろう？」
「……わかったよ」
　舌打ちした後、もう一度三人組を睨み付けて手を離す。解放された男子は、すぐさま二人を連れて逃げるように去っていく。何事かと見ていた周りの学生達も、騒ぎが終わるとすぐに昼食に戻っていく。
「んで？　あいつらは、こっち見て何の話してたんだよ？」
「この間、風見妹と藤原妹が実技をやっただろう？」
「千里が初めてやった実技の授業のことか？」
「そうだ。さて、ここで問題だ。俺達が使える魔法の系統を一つずつ言ってみろ」
「系統？　今更何言ってんだよ、火と水と風と土と光――」
「そして、闇だ」
　人の使える魔法には系統があり、例えば火の系統であれば火を起こせたり、風の系統であれば風を操ることができるといった、各系統それぞれに特色がある。
　誰がどの系統を使えるかというのは、完全に先天的な才能であり、努力によって使える系統を増やすと言うことはできない。ちなみに、通常は俊介のように光のみ、またはレ

イのように風と水、と言ったように一つか二つ程度の系統しか持てないのだが、健一は五つの系統を操れるという、かなり特異な魔法使いである。
「それがどうしたんだよ？」
「風見。俺達はあの研究者から闇系統があると聞かされ、そして何より風見妹の身の上を知っているから、同情的ではあれ好奇の目で見たりするようなことはない」
「……何が言いたいんだよ？」
「むしろ、ここまで言ってまだわからんのか？」
「悪かったな。どうせ俺は頭の中まで筋肉で出来てるような馬鹿だよ！」
「そこまでは言ってないが……まあ、もう少し勉強した方がいいとは思うな。それはともかく、ようするにだ、普通の生徒は闇系統の魔法などというものは知らない。知らないものを知りたがるのは、人の性、ということだ」
そこまで言われて、俊介の頭がようやく事態を理解する。
「あー、つまりなんだ、千里の魔法が珍しいから噂になってるって、そういうことか？」
「要約すればそうだな」
「んだよ、それなら面と向かって聞きに来ればいいだろ。ったく」
「誰も彼も、お前のように真っ直ぐに生きられはしないさ」
「そういうもんかね」
「そういうものだ」
蓋を開けてみれば何てことのない話に、俊介は脱力して肩を落とす。
「まっ、それぐらいなら別にいいか。千里も困ってるようには見えねえし」
「……風見」
「ん？　なんだよ」
「さっきも言ったが、俺達やクラスの連中は、風見妹をクラスメイトや友人だと思っている。それは、忘れないでくれ」
「はあ？　そんなの当り前だろ？」
「風見」
「だからなんだよ、さっきから？」
「誰も彼も、お前のように真っ直ぐに生きているとは限らないんだぞ」
真っ直ぐ俊介を見ながら言う。その言葉に俊介は、
「それはさっきも聞いたって。それより戻ろうぜ。さっさと食わないと昼休み終わっちまう」
微妙な言葉の違いに気づくことはなく、俊介はテーブルへと戻っていく。

＊　＊　＊

俊介が健一の言葉の意味に気づくのは、それからもう少し後になるのだった。
「と、いうことで、どうだ、風見？」
俊介にとって面倒なばかりの授業が終わって、放課後。授業が終わった解放感に浸るクラスメイト達はそれぞれ放課後ライフを楽しもうとしている中、レイの言葉に顔を顰

め、
「いきなり『どうだ?』って聞かれてなんのことかわかるか。ちゃんと順を追って説明しろよ」
「そうか。では、日曜にな」
「人の話聞けよ! いきなりなんだってんだよ!」
「やれやれ、ここまで言ってまだわからんか」
「わかるか! いくら何でも脈絡なさ過ぎだろ!」
「仕方ない。わかりやすく説明してやろう。いつものメンバーで遊びに行くから、日曜の午後一時に繁華街の西入口に集合だから忘れるな、と言っていたのだ。ここまで言えばお前でもわかるだろ?」
「むしろそこまで言わないと誰もわかんねえだろ。ってか、勝手に決めんなよ。オレにだって予定っつーもんがだな」
「あるのか?」
「……いや、ないけどよ」
せいぜい家で魔法の修練でもするぐらいだ。
「ならいいだろう? アイもお前が来るのを楽しみしているしな。なんなら、アイと二人っきりでも構わないが?」
「変なお節介やくなっての。まっ、しょうがねえから付き合ってやるよ。んで、何するんだ?」
「何、適当に繁華街をぶらつくだけだ。気分転換にいいだろう?」
「気分転換ねえ……別にオレはもう何かに詰まってるってわけじゃないぞ?」
以前は強くなることばかりを考え、一度の敗北で涙を流していた事もあったが、それも昔の事だ。強さに固執しない、というわけではないが、気を張り詰める必要も今の俊介(しゅんすけ)には必要ない。
「なに、お前のではない」
「? んじゃ、誰のだよ?」
「さて、まあ深くは気にするな。お前はいつも通りにしていればいい」
「わけわかんねえ……」
「いつものことだろう?」
「自分で言うなよ」
俊介(しゅんすけ)がツッコムと、「はっはっは」と笑いながらレイは去っていく。相変わらず、態度も言葉も行動もつかみ所がない、雲のような男である。
「俊ちゃん、帰ろ。……? どうしたの、疲れた顔して?」
「いや、良くあいつのダチやってんな、と思って」
「?」
ますます首を傾げる千里(ちさと)に、「なんでもない」と手を振って応え、鞄を手に取る。
「帰るか」
「うん」
「おっ、帰んのか。んじゃな、風見(かざみ)兄妹」
「おう。また明日な」
「また明日ー」

クラスメイトに見送られて教室を出る二人。瞬間、またチラチラと感じる視線。
廊下を歩いている間も、靴を履き替えている時も、校門までの道のりも、あちこちから視線を感じる。その原因はもうわかってはいるが、だからといってチラチラ見られても何とも思わない、というわけにはいかない。
「うぜえな……」
「何？　俊ちゃん？」
「何でもねえよ」
「そう？」
適当に言葉を濁して、極力視線を無視する。
学生が密集する校門までの道のりを過ぎてしまえば、生徒達の流れは分散し、視線の数はグッと少なくなる。そうなれば、一人一人俊介が睨み付けるだけで、向こうの方から視線を逸らしていく。
「あー、やっと落ち着いたぜ」
「さっきからキョロキョロしてたけど、何か捜し物？」
「ちげえよ。こっちを見てくる奴らがいるから、睨んでたんだよ。オレ一人だったら完璧にキレてるぞ」
もっとも、俊介一人であるなら注目を集めることはないのだが。
「……ごめんね、俊ちゃん」
「何謝ってんだよ？」
「だって、わたしのせいだもん。皆から見られてるの」
「なんだ、知ってたのか。ったく、つまんねえことしてるよな。興味があるなら、直接聞きにこいって――」
「ねえ、俊ちゃん」
俊介の言葉を遮って、千里が口を開く。人の話を遮る事もそうだが、千里にしては珍しく真剣な顔で、いつもの笑顔はそこにない。
「わたしの魔法って、変なのかな？」
少しだけ俯いた目で、小さな声でそう訊ねる。
「千里？」
「あ、ううん。やっぱりいいよ。何となく、そう思っただけだから」
「お前……」
「ほら、俊ちゃん。もうすぐお家だよ。早く帰ろ」
それ以上追求の言葉を許さないかのように、俊介の腕を取って走り出す。
「っとと、お、おい、千里」
「あはは。ほら、走って走って。どっちが早く着くか、競争だよ」
どこかに隠していたのか、笑顔を浮かべながら走る千里。だが、その笑顔はどこかぎこちなく見える。
（ホントは……気にしてたのか？　自分の魔法のこと。オレが気づかないだけで……？）
一番近くにいたはずなのに、全く気づかなかった。
（ああ……そういうことか）
健一が言った、『誰も彼も、お前のように真っ直ぐに生きているとは限らないんだぞ』という言葉。

レイが言った、『お前のではない』という言葉。
二人とも気づいていたのだ。千里(ちさと)が悩んでいたことに。
(オレだけ気づいてなかったのかよ。かっこわりぃ)
「どうしたの、俊ちゃん? ちょっと元気ないよ?」
「……なんでもねえよ。それより、競争するんだろ? もっと頑張らねえと、オレが本気出したら簡単に抜いちまうぞ」
「わわっ。じゃあもっと急がないと」
悩んでいる素振りなど欠片も見せないその背中に、俊介(しゅんすけ)は小さくため息を吐いたのだった。